青年の「甘え」に関する調査

── 高校生から大学生への比較研究 ──

原　崎　聖　子　　篠　原　しのぶ

Differing Adolescent Attitudes Toward "Amae" : A Comparison of High School and University Students

Seiko Harasaki　　Shinobu Shinohara

(2002年11月26日受理)

【問　題】

土居健郎が「甘えの構造」を記して以来，日本人の中の「甘え」の自覚と再認識が始まったと言えよう。そしてそれは，30年あまりたった現在においても，政治・文化・宗教などの様々な場面において，人間を理解する上での拠りどころとされている（北山，1999)。

われわれは1996年より，土居健郎の文献の中に登場する甘えに関する行動や状態を取り出し（土居，1971，1987）また，「甘え」から連想される様子についての自由記述を入手しながら質問紙を作成して，甘えを構成する因子を探りだしてみた。その結果，現在までに，「引っ込み思案の甘え」「屈折した甘え」「受容・承認を求める甘え」「責任回避の甘え」「非自立の甘え」「追従の甘え」の６種類の因子を抽出した（篠原，原崎，1999)。また，これまで進めてきた青年を中心とした研究の中で特に印象的だったのは，大学生を対象とした「甘え」の調査において，アメリカ・中国の大学生と日本の大学生の「甘え」を比較した場合，日本の大学生の甘え得点が高いということであった（篠原，原崎，2001)。その中でも「非自立の甘え」が高くなっていた。

この結果に対する原因については，社会的風土，家族の形態，親の養育姿勢，経済的側面などの原因が考えられ，現在さらに研究をすすめているところである。

ところで，これまでわれわれは，他国の学生と日本人大学生の「甘え」に関する比較資料は得ているのだが，日本国内での，それ以前の段階から大学生までの変化過程としての結果は得ていない。

そもそも，日本における大学生の生活環境は，同じ青年期の中でも，高校生までの生活環境とは大きく異なると思われる。具体的には，まず，家族との別居生活が始まる。あるいは別居をしないまでも親の監視下から距離を置き，自分の生活リズムを重視することが許されるようになる。大学においては，授業中の拘束時間以外は，どのように過ごすかを自由に自分で決定できるようになり，生活全般が明らかに変化しているといえよう。その中で，親や周囲の人々，社会や自分自身に対する「甘え」行動や意識が急激に変化するものと考えられる。また，日常生活の中で意識的・無意識的に親や教師に，その決定を依存していたものが，大学生になると自ら決定を迫られる場面が多くなることから，自由な生活感覚とともに，ストレス状況も増えることが予想される。したがって，自分自身で上手に社会に適応していく力がそれまで以上に必要とされてくるものと思われる。

以上のような点から，高校生から大学生にかけての環境の変化は，社会人になるべく精神的に成熟するための重要な課題を提示される時期だと考える。

そこで，今回の調査は，1998年，当時，高校２年生の生徒に実施した，「甘え」と「社会適応」に関する質問紙調査を，2002年の現在，大学３年生を対象に実施することにより，対象者が同一ではないの

別刷請求先：原崎聖子，中村学園大学人間発達学部人間発達学科(発達心理学) 〒814-0198 福岡市城南区別府５－７－１
E-mail : harasaki@cc.nakamura-u.ac.jp

で完全とはいえないが，その差を縦断的な変化として捉えてみることとした。高校2年生という，大学受験を念頭におきながら高校生活も楽しみたいが，そこに様々な社会的制約を受けていた時期から，大学3年生という時間的にも経済的にも自由の幅が大きく広がった様にみえるが，一方では，教育実習やインターンシップを目前に控えて社会人として就職ということを身近に意識し始める時期への行動や感覚はどのように変化するのか，また，男女差がみられるのかなどを調査することにより，青年期の更なる理解へとつなげていくことにする。

【調査手続き】

（調査Ⅰ）

調査対象：中村学園三陽高校2年生　102名
　　中村学園女子高校2年生　131名
調査時期：1998年6月～9月
調査方法：各クラス単位で質問紙調査を実施
調査内容：「甘えに関する項目」　75問
　　「社会適応に関する項目」　65問
　　各質問は，日ごろの自分に非常にあてはまる⑤～全くあてはまらない①の5段階による評定

（調査Ⅱ）

調査対象：中村学園大学流通科学科及び児童学科
　　3年生　男子53名，女子131名
調査期間：2002年7月3日～8日
調査方法：協力授業単位で質問紙調査を実施
調査内容：「甘えに関する項目」　75問
　　「社会適応に関する項目」　65問
　　各質問は，日ごろの自分に非常にあてはまる⑤～全くあてはまらない①の5段階による評定

【結　果】

Ⅰ．「甘え」に関する事項について

1．高校生から大学生への変化

1998年に甘えに関する質問75項目を因子分析し抽出された6因子について，高校生から大学生への変化を捉えてみることにする。表1には，甘え因子名と各因子に含まれる項目及び項目数を，表2には，グループごとの各甘え因子得点，標準偏差及びt検定結果を示している。

これら甘え因子の得点より，男子の場合は，高校生から大学生への「責任回避の甘え」の減少と，「受容承認を求める甘え」の増大が（$t=2.77$, $df=152$, $p<.01$： $t=2.51$, $df=152$, $p<.05$），女子の場合は，「責任回避の甘え」の減少と「引っ込み思案の甘え」「受容・承認を求める甘え」の増大が確認された（$t=2.99$, $df=258$, $p<.05$：$t=2.14$, $df=258$, $p<.05$：$t=1.66$, $df=259$, $p<.10$）。

今回実施した甘えに関する調査の中で，高校生から大学生にかけて示された「責任回避の甘え」の減

表1　各甘え因子に含まれる項目

引っ込み時案の甘え	項目数	信頼性係数
引っ込み時案である 控えめである 人の陰にかくれる 恥ずかしがりやである 人の後からついていくほうである	5項目	$\alpha=.8458$
受容・承認を求める甘え	**項目数**	**信頼性係数**
わかってほしいと思う 受け入れてほしい かまってもらいたい やきもちをやく 寂しがりやである	5項目	$\alpha=.8084$
屈折した甘え	**項目数**	**信頼性係数**
よく腹を立てる すぐ不機嫌になる いらいらする 周囲に八つ当たりすることがある ふてくされることがある	5項目	$\alpha=.8018$
責任回避の甘え	**項目数**	**信頼性係数**
義務を果たさない 許されると思う 責任ある仕事はしたくない 責任感がない すぐひとに頼む	5項目	$\alpha=.6729$
非自立の甘え	**項目数**	**信頼性係数**
甘さがある 未熟だと感じる 自立していないと感じる 弱音をはく 逃げ腰になる	5項目	$\alpha=.7092$
追従の甘え	**項目数**	**信頼性係数**
長いものにまかれる 人に取り入る 小異をすてて大同に付く へつらうことがある 人に従う	5項目	$\alpha=.6669$

（1998年度収集データーによる）

表2　6種類の甘え因子得点の比較

甘え因子	項目数	男子高校		男子大学		検定結果	
		因子得点	SD	因子得点	SD	t値	検定
引っ込み時案の甘え	5	15.61	3.98	15.56	4.98	0.07	n.s.
屈折した甘え	5	15.69	3.57	15.28	4.84	0.59	n.s.
受容承認を求める甘え	5	16.57	3.96	18.30	4.25	2.51	*
責任回避の甘え	5	15.28	3.33	13.56	4.54	2.77	**
非独立の甘え	5	17.76	3.05	17.90	4.04	0.11	n.s.
追従の甘え	5	14.76	3.09	13.94	3.64	1.46	n.s.
甘え因子	**項目数**	**女子高校**		**女子大学**		**検定結果**	
		因子得点	SD	因子得点	SD	t値	検定
引っ込み時案の甘え	5	13.73	1.19	14.90	4.32	2.14	*
屈折した甘え	5	16.17	4.75	15.68	4.82	0.81	n.s.
受容承認を求める甘え	5	18.93	4.00	19.72	3.62	1.66	+
責任回避の甘え	5	13.96	3.59	12.84	3.44	2.99	*
非独立の甘え	5	17.77	3.57	18.35	3.41	1.33	n.s.
追従の甘え	5	13.96	3.02	14.44	3.04	1.28	n.s.

**：1％　*：5％　+：10％

少は，人間としての成長を意味するものと思われる。つまり，高校生までの生活は，自分自身の快楽に重点が置かれ，他者がどうにか決定してくれるだろう，失敗しても誰かが自分をカバーしてくれるだろうという漠然とした甘えの意識に支配されていると思われる。しかし大学生になると，社会的な責任の所在自体がだんだん明確になり，ときには自分が責任の主体であるという認識と自覚が形成されていくものと思われる。

しかしながら一方で，大学生になると「受容・承認の甘え」が増大している。これは主に人間関係の変化に起因するものと思われる。大学生は広域にまたがる友人関係，より密接な男女関係，ボランティアやアルバイト等の上下の関係など，高校生までの狭い人間関係から，より変化に富んだ人間関係へと広がり，交流の機会も多くなる。つまり，それまでは特に自分を他者に理解してもらう努力を必要としない範囲の人間関係の中で生活していたものが，自分の存在や性格・行動パターンなどを理解してもらう努力をしながら，円滑な関係を図ることで新しい自分の居場所を確保しなければならない状態にあるといえるのではないだろうか。そういう意味においては，大学時代に適切な人間関係を保つということは学生生活全般に影響を及ぼす重要課題であるといえよう。

また，今回，「非自立の甘え」には高校生から大学生への有意差はみられなかった。したがって，上記のような環境の変化が，直接，自立の意識の向上には繋がってはいないといと考えられる。この点は，日本の大学生の問題点として捉えていく必要がある。

Ⅱ．「社会適応」に関する項目ついて

1．高校生から大学生への変化

高校生及び大学生の社会適応に関する変化を明確にするために，1998年当時，社会適応に関する65項目を因子分析して得られた7因子について比較検討してみることにする。表3には各因子を構成する適応項目及び項目数を示し，表4にはグループごとの各適応因子得点，標準偏差およびt検定結果を示す。

これによると男子では高校生の「許容性」が大学生より高く（$t=2.38$, $df=151$, $p<.05$），逆に大学生の「自己効力感」「満足感」が高校生より高くなっていた（$t=2.59$, $df=150$, $p<.01$：$t=3.62$, $df=150$, $p<.01$）。また，女子では高校生と大学生の社会適応因子においてはいずれの有意差も見られなかった。

男子においては大学生の自己効力感の向上と満足感の増加が見られた。しかしながら，学業面での適応下位項目の内，「学校をサボることはない」に関しては，男女ともにその平均点が大きく下がり，高校生から大学生にかけての学業に対する意識の低下を示していた（$t=7.07$, $df=150$, $p<..001$：$t=8.52$, $df=258$, $p<.001$）。

また，男女差の観点から言及すると女子の場合は，男子ほど社会適応因子に関しての高校生から大学生への明確な変化はみられなかった。さらに，大学生

表3　各社会的適応に含まれる項目

自己効力感	項目数	信頼性係数
仕事は人よりうまくできる 人が見ていても仕事がうまくできる グループの意見をまとめることができる 人の先頭に立って働くことが多い 仕事は人よりずっとはやい 人の前でもかたくならない	6項目	$\alpha=.8031$

社交性	項目数	信頼性係数
人と広くつきあうことができる 誰とでも仲良くできる 友人が喜んでいる時にともに喜べる 協力してくれる仲間が多い みんなと協力することができる 周囲の人とうまく調子をあわせていく いつも明るい気持ちでいられる 自分のまわりにはすてきな人が多い	8項目	$\alpha=.8015$

規律遵守	項目数	信頼性係数
遅刻や忘れ物をしないよう注意している 決められた時間を良く守る 約束を破ることは少ない 努めて規則を守るようにしている 与えられた仕事は最後までやり抜く	5項目	$\alpha=.7380$

満足感	項目数	信頼性係数
今までの人生に満足している 自分がすきだ 世の中は努力すれば報われる 自分の家族は良い人たちである 心から心配してくれる人がいる	5項目	$\alpha=.6943$

向社会性	項目数	信頼性係数
悩んでいる人の力になってあげる 不安そうな人を見ると自然に声をかける 町中で困っている人に気軽に手を貸す	3項目	$\alpha=.6787$

自己決定力	項目数	信頼性係数
自分が間違っていると思ったときは迷わず訂正する 自分の意志で動くことが多い 正しいと思うことは少々困難でもやり通す いやなことはいやだとはっきり断わる 疑問に思ったことはすぐ尋ねる許容性	5項目	$\alpha=.6580$

許容性	項目数	信頼性係数
自分の好意を無駄にされても気にならない 他人に害を与えられてもそれを許す 苦手な場所や人の前でも自分らしく振る舞う	3項目	$\alpha=.5540$

（1998年度収集データーによる）

表4　7種類の社会適応因子得点の比較

社会適応因子	項目数	男子高校		男子大学		検定結果	
		因子得点	SD	因子得点	SD	t値	検定
自己効力感	6	16.32	4.48	18.43	5.29	2.59	**
社交性	8	27.21	5.30	27.83	6.25	0.64	n.s.
規律遵守	5	17.79	3.84	18.52	3.88	1.11	n.s.
満足感	5	16.06	4.12	17.92	3.62	2.73	**
向社会性	3	9.74	2.69	9.88	3.06	0.29	n.s.
自己決定力	5	16.62	3.62	17.58	3.19	1.62	n.s.
許容性	3	9.02	2.41	8.03	2.44	2.38	*

社会適応因子	項目数	女子高校		女子大学		検定結果	
		因子得点	SD	因子得点	SD	t値	検定
自己効力感	6	17.23	3.39	17.04	4.05	0.38	n.s.
社交性	8	29.81	4.87	29.68	4.90	0.21	n.s.
規律遵守	5	18.75	3.73	18.36	3.77	0.84	n.s.
満足感	5	17.95	3.74	18.28	3.28	0.75	n.s.
向社会性	3	10.50	2.22	10.67	2.19	0.62	n.s.
自己決定力	5	17.34	3.21	17.17	3.16	0.43	n.s.
許容性	3	7.76	2.31	7.61	1.95	0.57	n.s.

**：1％　　*：5％

男子が自己効力感や満足感を高めていく一方で，女子大学生は仲間全体との親和性を求めていくことが適応の中心にあることが下位項目の検定の中で示され，男女の雇用機会均等と男女格差の撤廃が叫ばれている現代においても，就職活動を目前に控えている男女学生の性差が強化されていく様子が伺われる結果となった。

Ⅲ．甘えと社会適応の相関について

各グループの甘え因子と社会適応因子の相関関係（ピアスンの相関）について有意水準0.1%以上の相関係数を示したものを中心に検討しながら，さらに高校生から大学生への変化について言及していく。

（高校生男子の場合）

高校生男子の場合「引っ込み思案の甘え」及び「責任回避の甘え」と社会適応との相関が見られた。社会適応の中でも「自己効力感」・「社交性」は両方の甘え因子との関係性が高く（r＝－.483，－.314・r＝－.404，－.335），また，「自己決定力」は「引っ込み思案の甘え」と，「規律遵守」は「責任回避の甘え」との相関が見られた（r＝－.345，r＝－.378）。これらのことは，高校生男子の甘えの軽減や人間的な成長には，特に自己効力感及び社交性の向上が関与しているということを示唆していると考えられる。

（高校生女子の場合）

高校生女子の場合「引っ込み思案の甘え」「責任回避の甘え」及び「追従の甘え」において社会適応との相関がみられた。その中でも「責任回避の甘え」と「規律遵守」には高い逆相関が見られた（r＝－.552）。女子高校生の場合は，責任をまっとうするということと決められたルールを守るという事とに強い関係性があり，高校生女子の潔癖な態度が感じられる。また，社会適応因子のなかでも，男子同様に「自己効力感」が6種の甘え因子の内，4種の甘え因子と相関が高く（r＝－.478～－.308），自己効力感の向上が甘えの軽減に繋がる可能性を示唆した。また，「向社会性」や「自己決定力」も「引っ込み思案の甘え」との関係性を示した（r＝－.346，r＝－.358）。

（男子大学生の場合）

男子大学生の場合は，甘えと社会適応の間の関係性が明確に現われていた。つまり「引っ込み思案の甘え」は「自己効力感」「自己決定」と（r＝－.456，－.426），「屈折した甘え」は「許容性」と（r＝－.413），「受容・承認の甘え」は「規律遵守」と（r＝－.371），「責任回避の甘え」は「規律遵守」「向社会

表5　甘えと社会適応の相関（高校男子）

N＝98

	自己効力感	社交性	規律遵守	満足感	向社会性	自己決定	許容性
引っ込み時案の甘え	－.483***	－.404***	.102	－.145	－.167	－.345***	－.068
屈折した甘え	－.113	－.078	－.009	－.057	－.006	.018	－.004
受容承認を求める甘え	.071	.196	.099	.095	.113	.113	－.085
責任回避の甘え	－.314**	－.335***	－.378***	－.198*	－.079	－.132	.092
非独立の甘え	－.210*	.049	－.035	－.145	－.083	－.137	－.136
追従の甘え	－.032	.023	.098	.060	－.014	－.173	－.041

＊＊＊：0.1%　＊＊：1%　＊：5%

表6　甘えと社会適応の相関（高校女子）

N＝124

	自己効力感	社交性	規律遵守	満足感	向社会性	自己決定	許容性
引っ込み時案の甘え	－.478***	－.340***	.013	－.066	－.346***	－.358***	－.156
屈折した甘え	－.032	－.173	.078	－.128	－.011	－.017	－.274**
受容承認を求める甘え	.004	.163	.006	.111	.187*	.168	.028
責任回避の甘え	－.308***	－.162	－.552***	－.174	－.192*	－.261**	－.109
非独立の甘え	－.372***	.049	－.122	.097	－.191*	－.167	－.066
追従の甘え	－.324***	.115	.007	.206*	－.199*	－.284**	.041

＊＊＊：0.1%　＊＊：1%　＊：5%

表7　甘えと社会適応の相関（大学男子）

N＝50

	自己効力感	社交性	規律遵守	満足感	向社会性	自己決定	許容性
引っ込み時案の甘え	−.456***	−.282*	.134	−.269	−.311*	−.426**	−.255
屈折した甘え	−.129	−.292*	−.282*	−.137	−.342*	−.146	−.413**
受容承認を求める甘え	.243	.348*	.371**	.212	.203	.242	−.074
責任回避の甘え	−.254	−.396**	−.501***	−.203	−.464***	−.234	−.259
非独立の甘え	−.190	−.156	−.185	−.109	−.328*	−.082	−.393**
追従の甘え	−.262	−.169	.114	−.286*	−.293*	−.347*	−.259

＊＊＊：0.1%　＊＊：1%　＊：5%

表8　甘えと社会適応の相関（大学女子）

N＝121

	自己効力感	社交性	規律遵守	満足感	向社会性	自己決定	許容性
引っ込み時案の甘え	−.612***	−.207*	.040	−.206*	−.319***	−.468***	−.122
屈折した甘え	−.172	−.404***	−.258**	−.154	−.080	−.101	−.171
受容承認を求める甘え	−.081	.145	−.082	.198*	.130	−.012	−.109
責任回避の甘え	−.307***	−.275**	−.557***	−.199*	−.203*	−.215*	.069
非独立の甘え	−.422***	−.173	−.106	−.021	−.000	−.137	−.057
追従の甘え	−.383	−.029	−.118	−.179*	−.304***	−.406***	−.032

＊＊＊：0.1%　＊＊：1%　＊：5%

性」「社交性」と（r＝−.501，−.464，−.396），「非自立の甘え」は「許容性」と（r＝−.393）それぞれ相関を示していた。このことから，大学男子の甘えの形態は，どのような場面に適応できているかによって異なるということが考えられる。また，自己効力感や自己決定などの自分自身への適応のみならず，友人・仲間，社会生活全般に関わる適応性の向上が各甘えの軽減に影響を及ぼすだろうことを示唆している。

（女子大学生の場合）

女子大学生の場合は，男子大学生同様に甘えと社会適応の間に特徴的な関連性が見出された。つまり「引っ込み思案の甘え」と「自己効力感」「自己決定」「向社会性」（r＝−.612，−.468，−.319），「屈折した甘え」と「社交性」（r＝−.404），「責任回避の甘え」と「規律遵守」「自己効力感」（r＝−.557，−.307），「非自立の甘え」と「自己効力感」（r＝−.422），「追従の甘え」と「自己決定」（r＝−.406）にそれぞれ相関が見られた。また，社会適応の中でも自己効力感が3種の甘えと関わりを持っている点においては，高校生の特徴も合わせ持っているといえそうである。

これらの「甘え」と「社会適応性」の相関について，高校生と大学生の相違を捉えると，高校生において社会的な適応と関連するのは主に，「引っ込み思案の甘え」と「責任回避の甘え」であった。「引っ込み思案の甘え」と相関が見られた社会適応は「自己効力感」「社交性」「自己決定」であり，女子の場合はこれに「向社会性」が加わる。女子においては，社会の一員としての自覚を持ちながら積極的に周りの人々の役に立つ行動を行う場合に，「引っ込み思案の甘え」の克服が必要であるといえよう。また，「責任回避の甘え」と相関が見られた社会適応は「規律遵守」「自己決定」であり，男子の場合はこれらに「社交性」が加わっていた。このことは，男子生徒が，周囲の人々と充分に協力的・協調的な友好関係を保つことができれば，責任ある行動を引き受けられる可能性があるということを示唆している。

大学生の甘えと社会適応には，6種の甘えのタイプと各種社会的適応に，より細かい関係性が見出された。このことは，大学生は，人間関係においても行動面においても適応を必要とする場面の多様性から，それらの場へ適応する過程において，内在する甘えを意識させられるものと考える。大学生の甘えと社会適応との関係は，このような自己追求の結果ではないかと考えられる。

【結　論】

以上,「甘え」と「社会適応」についての高校生から大学生への変化をみてきたが，全ての甘えが成長の過程において軽減してはいなかった。男女共に「責任回避の甘え」は減少し,「受容・承認の甘え」のように却って増加するものもみられた。しかしこの受容・承認欲求は，欲求の段階としては，愛・所属の欲求と考えられることから，その後の自己実現へ繋がる重要な欲求だといえるのではないだろうか(澤田，1978)。

また，女子大学生における「引っ込み思案の甘え」の増加は，青年期の課題である性役割獲得の過程で起こる成長現象とも捉えられる。

社会適応については，適応の中心が高校生は学校内や家庭での出来事であるのに対して大学生は仕事，人間関係，社会全体へと移行し社会的なスキルの向上が感じられる。特に大学生男子においては，仕事に対する自信や自己効力感・満足感が高まり，社会人としての心構えを身につけつつあると考えられる。

以上，今回の研究において大学生は高校生に比べて，確実に社会的な成熟度が増加しているといえよう。

謝　辞

今回の調査に際しましては，流通科学部　福浦幾巳教授・福永良浩助手，人間発達学部　中尾宏助教授にご協力いただきましたことを感謝申し上げます。

「引用文献」

- 北山　修他（1999)「日本語臨床3「甘え」について考える」　星和書店
- 土居健郎（1971)「甘えの構造」　弘文社
- 土居健郎（1987)「甘えの周辺」　弘文社
- 篠原しのぶ・原崎聖子（1999)「青年の「甘え」と社会的適応に関する調査研究」福岡女学院大学人文学研究所紀要　人文学研究　第2輯　173-199
- 篠原しのぶ・原崎聖子（2001)「青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅲ」福岡女学院大学人間関係学部編研究紀要　第二号　35-43
- 澤田慶輔（1978)「人間科学としての心理学」

「主要参考文献」

- 加藤諦三（1995)「「甘え」の心理」大和出版
- 早坂泰次郎（1994)「関係性の人間学」川島書店
- 河合隼雄（1996)「日本人とアイデンティティー」講談社
- 有泉優里（2001)「「甘え」にもとづく人付き合いの自己効力感」日本グループ・ダイナミックス学会第49回大会発表論文集　114-115